

「さわやか」そして「おおらか」 ～a way of thinking

浦 啓 之
(1989 年度 B)

関学英文科卒業からはや四半世紀が経った。随分以前の事であるうえに、留年をしている先輩までからも心配されるほど不謹慎に学生生活を送っていたので、学部生として所属していた頃のことと真面目に語れる事柄はほとんど思い出せない。ただ、教員としてここで 15 年を過ごすうちに、関学英文科に於いて身に付いたことだとはっきりと自覚できるようになったものがある。それは、卒業してから教員として着任するまでここを離れていた 10 年間、前半分は留学のため異国で過ごし後半分は他大学で教職に就いていたのであるが、その間ほんやりとしかし確実にいつも心底に在り、次第にしっかりと知覚するようになった“way of thinking/reasoning”とでも表現すべきものである。言葉でもってそれを具体的に説明するのは大変難しいのだが、自分の感覚では『さわやか』と『おおらか』という言葉が非常にうまくそれを言い表せているように思う。

入学式の日まで関学に関する情報をほとんど持っていなかったのが、キャンパスに赴く時に抱いた最初のそして今だ変わらぬ深い印象は関学のさわやかさとおおらかさであった。これらは、当初はもちろん外観から来るものであったが、授業で接する先生方や、時間が経つにつれて同輩・先輩たちからも人としてのさわやかさ・おおらかさを感じられるようになり、やがてそれは英文科という自分の属する場そのものの醸し出す学問的雰囲気からも感じるものだと分かった。英文科の専門必修授業以外を（真面目に座って）聴講することがほとんどなかったのが、そのようなさわやかさ・おおらかさが英文科固有のものであるのか関学全体からも来るものなのかは判断できない

が、それらが当時の英文科に在ったことは確かだと言いたい。『さわやか』・『おおらか』のような形容詞は主観的判断を表すので、個々人で思い描く解釈が異なり得るのだが、ここでは「快晴の下の澄み切った様子」で『さわやか』を、「大草原の広々した様子」で『おおらか』を表していると解釈していただきたい。

しかし、これらの語を上のように具象的に明確化して定義すると、「英文科にさわやかさ・おおらかさが在った」という言明が解釈しづらい。「人がさわやかでおおらかである」という比喩はまだ上記の定義でも解り易いが、学問的営みを行う場・組織が『さわやか』で『おおらか』であるとはどういうことか？『さわやか』が「澄み切った様子」を、『おおらか』が「広々した様子」を表すのであれば、「学問的に澄み切っている」とは「論究において論旨が澁みなく明快で論理に破綻や超越のないさま」、「学問におおらかである」とは「研究において流行の学説に囚われず僻論にも陥らず、考察がしなやかで広角なさま」と捉えることができるのではないだろうか。外見上はもちろん人物に対しても、学問においても、このような『さわやかさ』・『おおらかさ』を当時の英文科に感じながら、そのような雰囲気の中で時間を過ごすうちにそれらを目指そうとする態度が自然と自分の中にも浸み込んでいったのではないだろうか。

『さわやか』や『おおらか』は、純朴な言葉である。でも、外見的・人間的にこれらの言葉が表わす雰囲気を身に纏うことは非常に難しく、自分でも身に付いているとは到底思わないのだが、学問的には上記の解釈にあるような態度を常に心がけ、それを武器に今まで学問の世界で闘ってきたと思っている。学問世界で生きていく上では、何処にいても努力と勉強さえすれば誰にでも身に付けられる学識と呼ばれるものよりも、学問的にさわやかでおおらかなことのほうがはるかに重要であり、そのような学問的態度を身に付けることは長い時間そのような雰囲気に浸り続けることでしか達成できない極めて難しいことであると思う。完璧にはないであろうが、そのような態度を知らず知らずのうちに会得できたことは自分自身にとっての大きな

喜びであり、関学英文科に大いに感謝するところである。今教員として願うのは、（出来るだけ暑苦しく押しつけることのないように）さわやかでおおらかなやり方で、自分が学部生の時に感じた関学英文科の『さわやか』・『おおらか』を学生たちにも感じ取ってもらい、そしてそれを後世にも引き継いでいってもらいたいということである。

They say everything can be replaced.

They say every distance is not near.

So I remember every face

Of every man who put me here.

from "I Shall Be Released" by Bob Dylan

